

タイトル	作家と山：内藤千代子『小説 冷炎』を例として
著者	仙波，千枝；SEMBA, Chie
引用	北海学園大学人文論集(60)：190(五五)-143(一〇二)
発行日	2016-03-31

# 作家と山——内藤千代子『小説冷炎』を例として

仙波 千枝

## 序 章

### 第一節 本稿の目的

大正五年一月二八日に京橋堂より刊行された内藤千代子『小説冷炎』(写真①)は、玉川和子という作家の上高地における避暑生活を描いたものである。作中で玉川は半月余りを上高地で過ごし、槍ヶ岳(標高三一八〇メートル)等に登山する。内藤は大正四年夏に上高地に足を運んでおり、『小説冷炎』にはその体験が反映されていると思われる。

上高地は日本アルプス登山の拠点として知られているが、日本アルプスは探険登山が明治四〇年代から大正二年にかけて隆盛を見、その後一般の登山者が増加して広く知られるところとなった。大正四年に上高地で養老館が開業した他、槍沢小屋(大正六年)・常念小屋(大正八年)・殺生小屋(大正九年)等の山小屋が相次いで開設されたことは、日本アルプスを訪れる人が増加したことを物語っている。

このような中内藤は上高地に滞在し、『小説冷炎』を世に送ったのである。自叙伝『生ひ立ちの記』(牧民社 大正三年)も既に上梓して翌年七月には第八版を数えており、大正四年七月二日には第五の著書にして初の書き下ろし『惜春譜』



写真①「小説冷炎」表紙(藤沢市総合市民図書館所蔵)

(五六)

(牧民社)が刊行され、さらに『女学世界』第一五巻第八号(大正四年八月一日)で長編の『小説毒蛇』<sup>②</sup>の連載が始まるなど、作家として躍進する中での上高地滞在であった。また登山史関係の文献には、内藤を日本婦人初の槍ヶ岳登頂者とするものが散見される。内藤が日本婦人初の槍ヶ岳登頂者で『小説冷炎』はそれを記した著書ということであれば同書は新たな話題を提供する一書たり得るが、どうであろうか。なお「槍ヶ岳」には他に「槍ヶ嶽」「鎗ヶ岳」「鎗ヶ嶽」等の表記がみられるが、本稿では引用文献は原典の通りとし、地の文では「槍ヶ岳」の表記を用いることとする。

本稿は、『小説冷炎』の執筆・刊行の背景を明らかにすることを通し、山へ足を運び自然を描くという作家の営みについて考察するものである。若者の世界を描いてきた内藤が、新興の避暑地上高地を舞台とし登山という新しい文化を素材の一つとして、『小説冷炎』でいかなる魅力を放ったのかという視点から同書を読み解いていきたい。

## 第二節 『小説冷炎』概略

まず、『小説冷炎』の概略をまとめておきたい。

主人公の作家玉川和子は、大正四年四月に行われた第一高等学校(以下一高、同校生徒を一高生)の記念祭で亡くなった恋人純一の友人川島に偶然再会する。川島は某省に勤務し既に結婚していたが、その後何度か玉川に会ううちにその夏に予定している上高地行きへの同行を勧めるようになった。玉川は川島を嫌っているのであるが、「山好きの和子はそ

れにはいたく心を惹かれて」同行を決めた。<sup>(4)</sup>そして上高地滞在中に槍ヶ岳・焼岳・穂高岳に登山し、松本の花街に立ち寄った後帰京し、小説は約一年後に玉川が詠んだ歌で締めくくられている。上高地に至るまでに見聞した風物や梓川・田代沼なども詳細に描かれ、徳本峠越えの場面では植物の鮮やかな描写と苦しさから不平を連発する玉川のユーモラスな姿が対照的である。玉川は上高地温泉に滞在し、他の滞在客と交わした会話も描かれている。なお『小説冷炎』は全二六〇ページであるが、巻末に書簡集「夢の花片」が付され、全三一七ページで一冊七五銭であった。

玉川は、次のような女である。

和子の職業は所謂女流作家といふもので（中略）大した頭脳もなければ手腕もなく取立て、これと云ふほどの物を書いたこともないが、不思議とわりあひに名が売れてゐて原稿の依頼人も始終あるし、出版でもすれば相当にはけもする。つまり低級だから万人向がするのたと云へば云はれる。和子は我ながら自分を決して偉い人間だとは思つてゐない。生意気で無学な意地つ張の仕末にならぬ女だぐらゐる万々承知してゐる。それだのに余りわつしよい／＼かつがれると、足元のあぶないやうな気恥しいやうな腹立たしさと迷惑とを覚えて心苦しかつたが、いつとはなしに馴れて了へばうら若い身に不似合な先生称をうけても平気である。<sup>(5)</sup>

「名が売れてゐて原稿の依頼人も始終あるし、出版でもすれば相当にはけもする」売れっ子作家としての自負心は、内藤の心情をも表していると言えよう。また「女流作家」の語の使用は初めてで、ここにも内藤の作家としての自信を見ることが出来る。

『小説冷炎』の表紙には大きな赤いハートが描かれ、『女学世界』に掲載された広告には「囚はれざりし恋愛の幾つかを巧みに綴つて今冷炎一篇を成しぬ其舞台は何処？男は誰ぞ？彼の女が味ひたるすべての恋は其の優婉なる才筆によりて余蘊なく扶出せらる。」<sup>(6)</sup>と謳われており、『小説冷炎』には内藤の恋愛遍歴が綴られているかのような印象を与える。また新聞にも同様の広告が掲載されている（『読売新聞』大正五年一月二七日）。しかし『小説冷炎』は、これらの広告からイメー

じされるものとは全く異なる内容であった。

玉川には、克巳(克己)という学生の恋人がいた。克巳との出会いは、「和子も胸に克巳といふ俳人の生れてから、大へんいぢらしく濃やかな情緒を持つやうになつて、物の見方もちがつて来た。」<sup>7)</sup>という変化を玉川にもたらした。しかし玉川は、克巳への思いを「見す／＼自分の魂を人に奪られる」<sup>8)</sup>と感じ、耐え難くなつたのである。苦悩の末、上高地出發前に玉川は「少なくとも今少し自分が立派なものになるまでは、顔を合せやうとは思つてゐない。」<sup>9)</sup>と決め克巳に別れを告げた。しかし玉川は克巳のことが忘れられず上高地で「毎日／＼あてもない克巳からの手紙を期待してゐる」<sup>10)</sup>状態、旅の終わりに至つても「都へ近づくとつれて和子はつく／＼克巳が恋しかつた。」<sup>11)</sup>のであつた。

「冷炎」という書名は、巻末の「銷<sup>き</sup>したるに叩くはたぞや胸の扉を去にませこゝは魔女の棲処ぞ」<sup>12)</sup>という歌に見られるような恋愛への冷めた思いによる。青年との交流を華やかに描き、指導者河岡潮風との恋愛が話題に上り、その後も内藤の作品に登場する作家の恋人のモデルが取り沙汰されるなど、内藤には恋多き作家のイメージがあつた。しかし『小説冷炎』の結末に描かれているのは、恋愛への「銷したる」心情であつたのである。

『小説冷炎』で島々から玉川らを上高地に案内し、登山にも同行したのは佐山平内という案内人で、同年七月に『大阪毎日新聞』記者橋詰せみ郎(本名良一)が上条嘉門次を取材した際の「案内者の佐内」<sup>13)</sup>と同一人物である。佐内という案内人については、横山篤美『上高地物語——その歴史と自然』(山と溪谷社 昭和五六年)に「島々駅近くの佐内」「前淵の佐内」が記述されており、佐内という名字はあまりなく地名から見ても両者は同一人物であると思われる、おそらくこの佐内が佐山平内のモデルであろう。『小説冷炎』に登場する佐山は、「丸々とした顔の、日に焼けて赤く光つた人のよささうな男」<sup>14)</sup>で島々の言葉で話し、玉川を槍ヶ岳と穂高岳に案内した。

橋詰は『小説冷炎』では橋本となつており、玉川の知己という設定である。『大阪毎日新聞』は大正元年に内藤を「謎の少女」と紹介したが(大正元年一月一七〜二六日 全九回 尾竹紅吉と内藤を紹介した記事で尾竹の分を含む)、その

記事の執筆者が橋詰であった。橋詰は上高地を「神高内」と記し、「名物の嘉門次を訪ふ」と題して大正四年七月一四〜一六日の三回にわたって上条を「日本アルプスの仙人爺」「中央アルプスの生字引」と紹介した。なお上条に取材した橋詰のこの記事は、加筆修正後『山岳』第一〇年第二号（大正四年一月二七日）「雑報」欄にも掲載された。また橋詰は『山岳』第一〇年第三号（大正五年五月一日）「雑報」欄で、「嶋々の宿の薄暗いランプの蔭で、明日は私の荷物を持たうといふ案内者の佐内」から聞いた「山のローマンス」を紹介している。

上条嘉門次は、日本アルプスについて語る上で欠かせない存在であったと言える。『小説冷炎』で玉川は上条の小屋を訪れており、内藤もおそらくそうしたと思われる。ウェストンの案内人を務めたことで著名になった上条はこの時六六歳で（大正六年一〇月二六日六九歳で死去）、他の案内人の日当が一円五〇銭であったところ上条は二円でしかも荷物を担がなかった反面<sup>16</sup>、来訪者は誰でも快く迎え入れるという人懐こい一面もあった。内藤は上条を、「紺の股引筒袖の上に暖かさうな毛皮の袖無しを着、笑ふと眼の細い、口の耳まで裂けたやうな、憎気はないがビリケンそっくりの顔立をしてゐた。」<sup>17</sup>と描いている。また「日本アルプスの名と共に日本人より外国人の間に古くから広く知られてゐる山の元老だと思ふと、一種の尊敬の念が加はつて和子は真摯な態度をくづさなかつた。」<sup>18</sup>とする玉川の上条への敬意は、内藤の心情をも表していると言えよう。そしてここでの会話は、玉川に槍ヶ岳登山を促すものとして位置づけられている。

槍ヶ岳登山には、玉川は川島と佐山と共に出発し、坊主小屋（標高二五六〇メートル付近）に到着した際「まだ太陽は青空に高く輝いてゐ」たため、「いつそ今一奮発もうひとのしのしたらどうだ！」という川島の提案に玉川が「行かうぢやないの」<sup>19</sup>と応え、槍の肩から二三分かけて頂上に到達した。そして山頂で玉川は、睡魔と闘いながら周囲の「雄大と云はうか、混乱と云はうか美観と云はうか」<sup>20</sup>という景観に驚嘆し、「川島はノートを引つ裂いた紙片に記名して宮筆者注\*播隆上人が設置し、阿弥陀仏、観世音菩薩、文殊菩薩、釈迦牟尼仏が安置されている」<sup>21</sup>に納めた。<sup>22</sup>後坊主小屋まで戻つて泊まつた。その後玉川は、夕食も翌日の朝食・昼食もほとんど口にしないまま翌日午後二時半ごろ上高地へ帰着したのである。

上高地を出発した日のうちに槍ヶ岳頂上を極めたのは、小島鳥水「鎗ヶ嶽探險記」<sup>(23)</sup>と同様であった。

上高地に滞在すること半月余り、玉川は槍ヶ岳・焼岳登頂後八月半ばに一旦帰京を決めたものの、帰京の日の朝「今朝はあんまり好お天気だから穂高へ行つて見ないこと。」<sup>(24)</sup>と穂高岳登山を思い立つて足を運び、その翌日上高地を離れた。「穂高」の山頂の様子を内藤は「其処は矢張り風雪に虐げられた岩角とごろた石の堆積で、しかし鎗の穂のやうに狭くはなく、そのまゝ脊梁伝ひに前穂高や中穂高の方へも行けるやうになつてゐる」<sup>(25)</sup>と描いており、この「穂高」は明神岳であると思われる。

松本の花町への立寄りや川島の発案によるもので、玉川は「大いに廓の情趣を味はつて来ませう、ほゝゝ。東京だとまた何んのかんのうるさいけれど……信州辺（こんなとこ）ならかまはないわ。」<sup>(26)</sup>との言葉を口にしてゐる。内藤は『惜春譜』でも吉原に足を踏み入れたことを記しており、話題となつた尾竹紅吉ら青鞥社社員（あざな）の吉原登楼を意識していると言えよう。ここで玉川は、芸妓には嫌悪感を抱いたものの、半玉の嘉代には「東京へ帰つたら何かよろこびさうなものを送つてやりたい」<sup>(27)</sup>と妹のような感情を抱いている。

『小説冷炎』で内藤は、作家玉川和子の避暑地暮らしを描いた。内藤の作品は内藤自身が主人公であるところからえられ読まれることが多いが、内藤の人氣が高まつていたからこそなし得たものであると言えよう。なお内藤が寄書家として活躍していた『女学世界』にも「日本アルプスへ！」と題した作品（全三回）<sup>(28)</sup>が掲載され、友人兄妹と上高地を訪れ槍ヶ岳に登頂するという内容である。

『女学世界』の「誌友倶楽部」欄（筆者注\*投書欄）には『小説冷炎』に対する読者の反応はみられないが、「日本アルプスへ」には次のような感想が寄せられている。

千代子様の「日本アルプスへ」はほんとうに面白く／＼拝見いたしましたわ。急に私も一度登つて見たうなりました。ほんとうに雄々しい方でゐらつしやいますね。

十月号には自分の一番期待する内藤様の毒蛇を拝見する事が出来ないで物たりなう御座いましたが、あの達筆に描かれた「日本アルプスへ」を拝見しては、彼の嶮山も目のあたりに見える様で御座います。<sup>29)</sup>

第一五巻第八号（大正四年八月一日）で連載が始まったばかりの「小説毒蛇」を休載しての「日本アルプスへ！」の連載であったが、内藤は日本アルプスの魅力を十分に伝え得たのである。読者は「日本アルプスへ！」を内藤の登山記ととらえ、「ほんとうに雄々しい方であらうしやいますね。」とあるように、登山という営みは作家としての魅力を増すものとなったのであった。

「女流作家」が上高地に滞在し登山を試みるという『小説冷炎』は、いかなる魅力を放ったのであろうか。本稿では山と上高地、そして槍ヶ岳登山に焦点を当て、以下で検討していくこととする。

## 第一章 山への関心

### 第一節 登山の興隆

生活の糧を得るために山に入り、成長の証として山に登り、山野を旅しその自然を描くという営みは古くから行われていたが、志賀重昂が『日本風景論』（政教社 明治二七年）で山の自然を描き、「山は自然界の最も興味ある者、最も豪健なる者、最も高潔なる者、最も神聖なる者、登山の気風興作せざるべからず、大に興作せざるべからず。」<sup>30)</sup>と説き登山の装備や方法を詳述したことは、人々の目を登山に開かせる役割を果たした。そして明治二一年にイギリス聖公会の宣教師として神戸に派遣されたウェストン（Walter Weston）が一八九六（明治二九）年に英マレー社より刊行した“Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps”（岡村精一訳『日本アルプスの登山と探検』梓書房 昭和八年）が後に山岳会を設立した小島烏水らの目に留まり、明治三五年に宣教師として再来日していたウェストンと小島ら

の間に交流が生まれたことが登山興隆の契機となった。

そして明治三八年一〇月一四日に山岳会が発足し<sup>(31)</sup>明治四二年六月一日日本山岳会と改称<sup>(32)</sup>、以下日本山岳会、翌明治三九年四月五日に機関誌『山岳』が創刊された他、小島烏水『日本山水論』(隆文館 明治三八年)・高頭式『日本山嶽志』(博文館 明治三九年)等日本山岳会関係者による著書も相次いで刊行された。また名古屋愛山会(明治四二年一〇月設立)<sup>(33)</sup>・信濃山岳研究会(明治四四年八月設立)<sup>(34)</sup> 大正八年信濃山岳会と改称<sup>(35)</sup>・飛騨山岳会<sup>(36)</sup>なども各地に発足したのであった。なお飛騨山岳会は、日本山岳会入会にも入会している<sup>(37)</sup>。

さらに高等小学校用作文教科書にも「登山に友を誘ふ」という手紙文の課題が登場するなど、登山が身近なものとなっていたことが分かる。府立第三中学校生徒であった後の作家芥川龍之介が槍ヶ岳に登頂したのは明治四二年八月であった<sup>(38)</sup>。

女子教育機関においても、長野県立長野高等女学校の戸隠登山(明治三五年)・東京府立第一高等女学校の富士登山(明治三九年)などが行われている<sup>(40)</sup>。明治三三年に双葉幼稚園を開園した野口幽香は草創期より日本山岳会に入会し、『山岳』第一年第三号(明治三九年一月一三日)に掲載された「初登山(岩鷲登山記)」で植物への関心から登山に関心を持つようになったことを述べ、岩木山登山において多種の植物を採取したことを記している。また『女学世界』などの婦人雑誌にも登山を紹介する記事がみられる。

大正期になると、第一高等学校陸上運動部山岳会(大正二年六月二八日発会式挙行)<sup>(41)</sup>・二高山岳会(大正三年六月八日設立)<sup>(42)</sup>・慶応義塾山岳会(大正四年五月二九日発会式挙行)・神戸高商山岳会(大正四年七月一〇日発会式挙行)<sup>(43)</sup>・八高山岳会(大正三、四年頃設立)<sup>(44)</sup>等が相次いで発足したのであった。発会式等には日本山岳会より小島烏水らの出席がしばしばみられ、山岳熱の高揚に一役買ったと思われる。

山岳会や山岳部の活動はしばしば新聞紙上で取り上げられた。第一高等学校陸上運動部山岳会が大正二年夏に行った

登山には約四〇名が参加し、その記録は「日本アルプス跋涉記」として『時事新報』に連載された（八月九日～九月二日 全三一回）。なお『時事新報』は同年夏、東京高等師範学校附属中学山岳会の登山記も連載している。また一高では登山や山岳に関する講演会や談話会がしばしば開催され、『校友会雑誌』第二三〇号（大正二年二月四日）を「山岳号」として送り出した。一高生との交流を好む内藤も当然聞知していたと思われる。

その後一高山岳会は大正三年三月五日に行われた校友会総会において旅行部として独立し、同年夏に木曾御嶽と駒ヶ岳方面・常念山脈と槍ヶ岳上高地方面・白馬岳方面・針の木峠經由立山の四班に分かれて登山・縦走を試みた。そして燕岳・大天井岳・常念岳・槍ヶ岳・穂高岳等の登山記「日本アルプス」（『万朝報』大正三年七月一日～八月三日 全一四回）、槍ヶ岳・穂高岳登山を記した「日本アルプス」（『東京朝日新聞』大正三年七月一日～八月八日 全一四回）、白馬岳方面の登山記「白馬山へ」（『万朝報』大正三年八月四～十三日 全九回）、針木枝隊と称する小隊の登山記録（『時事新報』大正三年八月三～二三日 全八回）がそれぞれ連載されたのである。

登山という新しい文化は同調者をよび、その営みは新聞などにより知られるところとなった。しかし一高の生徒が述べたように、登山は「米、味噌、鍋、草鞋等々大部分の荷物を強力に背負わせている大名旅行」で、登山用品や食料のみならず、写真機を案内人に担がせる登山者もいた。そして「雪融の水で作った味噌汁は何故左様にうまいのでせう、私は、一杯の飯を嘔みこむ間に五杯も汁を代えたのです。」と雪解け水で調理した食事に舌鼓を打つのは登山の醍醐味の一つであろうが、当時の登山記には牛肉の缶詰め、ウイスキー、煉乳と砂糖入りの紅茶などを飲食したことがしばしば記されており、多くの人々にとって登山は夢や憧れの世界でしかなかったのであった。このような中登山について描かれた記事や文章は、登山の案内記として読まれるだけではなく、多くの人にはなし得ない世界を展開するという魅力をも放ったのである。

## 第二節 山の魅力

山は、どのような魅力を持つものであったのだろうか。一高の生徒は『校友会雑誌』で、登山の理由として「たゞ無類に山岳が好き」であることや写真好き、運動好き、自然への関心などを挙げたが、それだけではないとして次のように述べている。

あの瞬時(筆者注\*山を間近に見た時)に於ては万人斉しく、自分の心臓に酒精でもぬられた様な感を起すに相違ない。心中一つの疑團なく晴天白日恨なく、悲なく、哀なく、怒なく、喜なく、恋なく、自己あるが如く、なきが如く、たゞあるものは超自然の大自然実に禪の三昧や、神来インスピレーションを感じるときはこんな時であらう<sup>(30)</sup>

無我の境地となり、「禪の三昧」「神来」を感じ得ることが山の魅力であった。志賀重昂も『日本風景論』で、「四面の間然寂靜なるに潜思想せば、君が頭脳は神となり聖となり、自から靈慧の煥発するを知る」と述べている。<sup>(30)</sup>

また『山岳』第八年第二号(大正二年八月三一日)「雑録」欄に掲載された「一高山岳会の成立」では、「山岳会と云ふ名は、登山会とは聊か違ふものとして発達されん事を祈つておきたいと思ふ(中略)登山旅行だけの集団は何の意味もないものではあるまいか」と述べられており、山に登るといふ営みを通して多くのことを学んでもらいたいという一高生に対する思いを見ることができる。山に足を運ぶことによりさまざまな感化が得られることは、山の欠くべからざる魅力であったのである。

そして登山により文学作品に描かれた世界を追体験し得ることが、山の魅力をさらに高めた。一高の生徒は、槍ヶ岳山頂での思いを次のように綴っている。

人間と、ナチュールと、ユーマンテと、ユーゴー先生之には大に首を捻つたと有つたが、人が自然の懐に入る時に限り無き慕しさを見出し、凄惨なる人生の戦に疲れた胸も光り輝く、山見れば山の姿、川見れば其の動作、古来より二三の人が

欺ざる自然を愛しただろうか、而も尚秋風蕭條の夕まぐれ、人間界恋しと泣くは誰が見ず、幾代なるも人は愛の泉、恋の花を尋ねて儚なき旅に登る<sup>51</sup>

一九世紀末、自然主義文学隆盛の後にヨーロッパで誕生したロマン主義文学においては、自然を友として生きることが理想とされ、山岳の神秘を愛しその美しさが描かれた。このような中、登山は読書から更に一步進んで「自然の懐に入る」ことであつた。これにより登山は、文学作品に描かれた世界を追体験する術となつたのである。そして脅威ではなく「限り無き慕しさを見出し」得ることは、何事にも替え難い喜びなのであつた。また自然科学の研究が進み工業化・都市化が進展し、旅行や園芸などを通して自然と接することに對する嗜好が高まる中、文学作品に描かれた自然を味わうことは読書の醍醐味の一つとなつたのであつた。現実を露呈する自然主義文学隆盛の後、情緒的な文学が好まれるようになつていたことも自然の美しさを描写した作品が愛された一因であろう。このような中で山は、広く魅力を放つ文学のモチーフたり得たのであつた。当時の登山記には、他にワーズワース、ロングフェローなども散見される。

横浜正金銀行行員（明治二九年入行）との二足の草鞋を履きつつ明治三〇年二月より『文庫』記者として小島烏水が世に送つた文章は、山の魅力を知らしめるうえで大きな役割を果たしたと言えよう。小島は明治期の「紀行文家」として饗庭算村や幸田露伴・大町桂月・田山花袋らを挙げてゐるが、小島が田山花袋を「野の人」<sup>52</sup>、「武蔵野の人」とよび、「その当時の紀行文家と言はれる旅行好きの人々、誰一人登つてゐなかつたのである。沉んやその他の文壇人をや。」と述べたように、自身の登山に基づく小島の山の描写は他の作家の作品とは一線を画するものであつた。<sup>53</sup>

小島の作品について、杉本邦子は「小島烏水の『鎗ヶ嶽探險記』（『学苑』第四五七号 昭和五三年一月）で「自然描写における科学的知識の導入なども、当時の凡百の紀行文の欠を補うものであつた。」と述べ、「鎗ヶ嶽探險記」の特徴として「精緻な山水描写」を挙げている。また熊谷昭宏は「小島烏水『鎗ヶ嶽探險記』論——要請された『その土地特有の景象』について——」（『同志社国文学』第六〇号 平成一六年三月）において、小島の紀行文を「文学作品の風景描

写に『科学的』知識を盛り込む試み」と評価し、「鎗ヶ嶽探險記」には美文によって綴られた紀行文にはない「正確」な記述が見られるとしている。実体験に基づく正確な自然描写を身上としながら、無機質な文体に陥ることなく文学作品としての味わいも併せ持つ点が小島の特長で、これにより山の魅力が伝えられたのであった。

また日本山岳会は「山岳」第一年第三号(明治三十九年一月一三日)「会報」欄で、「本会は性質上、純正科学をのみ旨とするが如き、一方に偏したるものにあらざるためにも、因るべきが、詩人文士の入会せらるゝ向き、甚だ多し」として小山内薫・柳田国男・河井醉著・正岡芸陽らの名を挙げ、「文学会にあらずして、かくの如く、多くの詩人文士を網羅したる会の、他にあるを知らず、是れ本会の榮とすることなり。」と述べている。なお作家だけではなく、大下藤次郎・茨木猪之吉・丸山晚霞らも日本山岳会会員で、山の絵を残した。山に登るだけではなく、山の魅力を描き伝えることも大なる関心が抱かれ、様々な営みがなされていたのである。そしてこれらにより山の魅力は広く知られることとなり、それが登山の隆盛にも結びついたと言えよう。

では、内藤は山とどのように関わってきたのであろうか。内藤は富士山の七合目まで登山した経験綴った「富士遭難記」が『女学世界』第一三卷第二二号(大正二年九月一五日)に掲載されている。また「日本アルプスへ!(その二)」「女学世界」第一五卷第一〇号(大正四年一〇月一日)では、徳本峠越えの場面で「私は今まで山登りにはかなり経験もあり、こんな筈ではなかったのにけふの苦しさは普通事ぢやない。」と登山の嗜みがあることを匂わせている。なお内藤は日本山岳会の会員ではない。

注目すべきは、『淑女画報』第四卷第四号(大正四年四月一日)の「画報(筆者注\*グラビア)」に掲載された「ヴァーヂニズムの内藤千代子女史」と題する登山姿の内藤の写真(写真②)である。『淑女画報』の同号は「結婚風俗号」で内藤に関する記事はなく、写真には「女史は今年二十三歳のあたら人生の春を処女主義とやらの寂しき蔭に隠れて、あせ行く花の色をぢつと見つめてゐらつしやる。此の結婚号に処女主義の女史を紹介するのも亦何かの縁でありませう。」と

赴き、翌年『小説冷炎』を世に送ったのであった。

### 第三節 日本アルプスへの目

小島烏水は「梓川の上流」（『早稲田文学』第一七号 明治四〇年五月）<sup>54</sup>の冒頭で、日本アルプスの魅力を次のように述べている。

明科停車場を下りると、犀川の西に、一列の大山脈が峙つてゐるのが見える、我々は飛驒山脈など、小さい名を言はずに、日本アルプスと、こゝを呼んでゐる、この山々には、名の無い、或は名の知られてゐない高山が多い、地理書の上では有名になつてゐながら、山がどこに晦かれてゐるのか、今まで解らなかつたのもある

日本アルプスは山々の総称で個々の山には知られてゐないものも多いため、日本アルプスには未知の地という魅力が



写真②『淑女画報』第4巻第4号  
（神奈川近代文学館所蔵）

の説明が付されている。「ヴァージニズム」「処女主義」とは結婚を拒否する内藤の持論で、登山姿の内藤は「結婚」とは対照的な存在と位置づけられている。内藤がこのような写真撮影に応じたのは、登山に対する造詣を示す意図があつたためではないかと思われる。

山は、自然の偉大さに触れ「禪の三昧」「神来」を体感し得る場として悩み多き青年を惹き付けた。また山は、文学の世界を追体験することにより知的好奇心を満たす場でもあつた。そして山の魅力を描き出さんとする作家や画家による営みもなされていたのである。大正四年夏、内藤はこのような営みを担うべく上高地へ

あった。加えて、日本アルプスというヨーロッパの香りがする呼称も、他の地域の山とは異なる魅力を醸し出したのである。

ウェストン『OF THE ORIGIN OF THE TERM “THE JAPANESE ALPS”』（『山岳』第一三年第二号 大正八年四月一七日）によると、飛騨と信州にまたがる山岳地帯を「The Japanese Alps（日本アルプス）」と最初に記したのはサトウ（Ernest Satow）編「Handbook for Japan」（筆者注\*：“A Handbook for Travelers in Central and Northern Japan”、マレー社 一八八一（明治一四）年）第一版で、同書では次のように述べられている。

The range bounding these provinces on the E. is the most considerable in the Empire, and might perhaps be termed the Japanese Alps.<sup>(55)</sup>

これらの地域（筆者注\*：越中及び飛騨）の東側の境界に接する山脈は日本で最も重要で、おそらく日本アルプスと名付けられるであろう。（筆者訳）

ウェストンの記事によれば、サトウの記憶では、「日本アルプス」の呼称は造幣局に技師として来日していたガウランド（William Gowland 明治十一年七月二八日外国人として檜ヶ岳初登頂<sup>(56)</sup>）の提案であった。しかしガウランドはそれを否定し、日本アルプスを訪れるヨーロッパ人が稀であったことからこの呼称はやがて忘れられてしまった。しかしウェストンが明治二四年に日本アルプスに初めて足を踏み入れ、その後自著「Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps」を初め多くの著作物や講演において「日本アルプス」の語を用いるようになった結果、「日本アルプス」の呼称は広く知られるようになったのである。『山岳』は第一年第三号（明治三九年一月二三日）を「日本アルプスの巻」として世に送っており、日本アルプスに対する関心の高さを見ることができると、なおウェストンは「日本人が『The Japan Alps』の語を使用するのを数度にわたり見たことがあるがそれは間違いであること」<sup>(57)</sup> 自著「The Playground of the Far East」（マレー社 一九一八（大正七）年 岡村精一訳『極東の遊歩場』山と溪谷社 昭和四五年）の書名にも

用いた「The Playground of the Far East」の名に日本アルプスほどふさわしい場所はないとも述べている。

大正四年は、日本アルプスに対する関心がさらに高まった年であると言えよう。『大阪毎日新聞』は「大和アルプス踏破団（縦走隊）」（団員六名）を結成し、七月八日からの二二日間わたる行程を七月一四日より「大和アルプス縦走記」として連載した（八月一日 全一九回）<sup>58</sup>。長谷川如是閑・河東碧梧桐らによる登山が行われたのもこの年で、『朝日新聞』に登山記が連載された。また大阪市教育会は登山団を募集し、全国から応募のあった八〇余名を三班に分け、八月一日より順次出発している<sup>60</sup>。一高旅行部も赤石山脈縦走と立山・剣岳登山を行い「日本アルプス」（『東京朝日新聞』八月二日）九月一二日 全三五回、「立山跋涉記」（『万朝報』八月八日）一五日 全五回）として連載した。なお一高旅行部では同年に日光奥山の探訪も行ったほか、第一次世界大戦勃発による海外雄飛熱の高まりを受け、海軍の協力による「南洋占領地」の見学（五一日間、参加者一八名）、青島・北京・奉天・大連（約四〇日間、参加者数不明）、青島・北京・南京・上海（参加者約一〇名）等を訪れる大陸方面の二隊の旅行も実施している<sup>61</sup>。

そして明治四三年七月に前川文栄閣より刊行が開始された小島烏水『日本アルプス』第四巻が三年のプランクを経て刊行されたのも大正四年であった（七月）。小島は、『日本アルプス』は、名前が珍しいだけに、可なりに旅行好きの人たちの注目を惹いたらしく、その頃として、高価な贅沢な本でありながら、予想よりは、善い売れ行きであった。<sup>62</sup>と述べている。当初一巻のみの予定であったが、遂に第四巻まで刊行するに至ったのであった。また窪田空穂が大正二年夏に行つた槍ヶ岳の登山記を『歌誌国民文学』に連載したのも大正四年である<sup>63</sup>。

これらにより、日本アルプスの魅力が広く伝えられたのであった。内藤が『女学世界』に連載した「日本アルプスへ！」も、このような登山記の隆盛の中に位置づけることができよう。

加えて、『大阪毎日新聞』が「今夏の中央アルプスは多く▲新噴火の焼嶽登」が大流行になるらしい<sup>64</sup>と報じたように、大正四年六月四日の焼岳の噴火が焼岳のみならずその周辺地域の景観を大きく変えたことも、大正四年夏に日本アルプ

スが関心をよんだ一因としてあげることができよう。『大阪毎日新聞』は、同年六月二四日より日本アルプスの写真を連載している（七月一六日 全二〇回）。

内藤は『説冷炎』において、焼岳の噴火により作られた大正池を次のように描いている。

大正池はその年六月焼嶽大爆發のとき凄しく崩落した土砂や大押出なだれの為に、梓川の一部がせきとめられて、細長い湖水みたやうなものが現出されて了つたのである。またの名を「白樺の池」とも云ふ。なぜならば白樺の林がそのまゝ池中のものとなつてしまつて、満々と湛へた水に青い梢や白い幹の影を落してゐるさまは実にたとへやうもない奇観であつた。池の水は綺麗に透き徹つてゐる乍ら凄いほど真青だつた。まるでエメラルドを溶かしたやう。見ても見ても見あかない。

けれどもまたその四囲の惨状は目もあてられぬ。火事場とも地震の跡とも云ひやうがなかつた。灰汁のかたまつたやうな地上は、まだいくらか硫黄の匂ひもして、ねとくと下駄の歯に吸ひつく。小家ほどもある大石や白骨のやうに焼けこげた樹々は灰泥に埋まつて散乱し、対岸の山も四合目あたりまではその惨害をかふむつて樹木の枝と云はず熊笹と云はず、被つた灰の重量に得堪へず、生き乍らしつくひ細工のお化のやうになつて垂れ下つてゐる。<sup>(6)</sup>  
 「透き徹つてゐる乍ら凄いほど真青」な湖水からのぞく「白樺の林」は、上高地の新たな美観ととらえることもできる。しかし「硫黄の匂ひ」や「下駄の歯に吸ひつく」ものに「小家ほどもある大石」、そして周囲の「白骨のやうに焼けこげた樹々」は、この景観が「惨状」とよぶべきものであることを気づかせるのであつた。『説冷炎』で玉川は上高地に到着した日の夕方大正池を見に行つており、焼岳の噴火に対する内藤の関心の高さを示している。

一方焼岳については、内藤は次のように描いている。

白金を磨き上げたやうな太陽が赫と面を打つて、焼嶽に映ずると、噴煙が金色を帯びてさながら金龍ののたくる如くである。焼嶽は地獄のアルプスの様な活火山だつた。赤黒い醜怪な地肌を露出して、たゞ枯木の幹ばかりすく／＼

立つて立つてゐるのが遠くから見ると、恰ど老人の禿頭にちよろ／＼と髪が残つてゐる通りなので和子は可笑しくて仕方がなかつた。今一つおまけにこのおぢいさん、薬缶頭の方々からやたらに煙を吐いてゐる。幾條にも分れて天に沖する。末は薄れて雲に入る。青大空に行方も知らず……<sup>66</sup>

焼岳を「地獄」「赤黒い醜怪な」と表現した一方で、煙を吐く「薬缶頭」に見えると少しユーモラスにも描写している。『小説冷炎』には焼岳の噴火に対する恐怖は見られないが、この記述は「活火山」のあり様を生々しく伝えていると言えよう。

日本アルプスは、日本にありながら未知であつたため、人々の関心を惹き付けた。そして大正四年夏には自然の威力を目の当たりにし得る場ともなり、従来よりの関心の高まりと相待ちさらに注目を集めていたのである。大正四年夏を上高地で過ごした内藤は、正に注目的となつていた日本アルプスにその身を置いていたと言えるのである。

## 第二章 避暑地上高地

### 第一節 上高地の魅力

『小説冷炎』において主人公玉川和子が半月余り滞在した上高地の魅力を、高野鷹蔵は「上高地の記」（『山岳』第四年第一号 明治四二年三月二五日）で次のように述べている。

上高地の地たるや、文人の筆に、画家のキャンバスに、其自然美を讃へられたものは、蓋し稀である、上高地の景たるや、繊細美はないが、然し人の勢力の及ばざる大なる美がある、日光の建築と、伊勢の太廟とを較べたら、前者は其細密な彫刻に美があるである、太廟は其始原的な、大なる所に崇高な美がある、上高地の美は後者に属する方だ。

高野によると、上高地の「自然美」は「繊細美」ではないが、「伊勢の太廟」の如く「始原的」「崇高」で、「人の勢力」の及ばざる大なる美」である。それは、宮川の池の畔にある穂高神社奥宮の穂高見命が上高地の土地の神である故「河内」の表記を用いるべきと主張した小島烏水のイメージと重なる。横山篤美が『上高地開発史』（山と渓谷社 昭和四六年）で、小島の主張は誤りであるとしたりうえて「穂高明神信仰に傾く人たちが（中略）上高地を穂高明神の神域と意識付けたかった意図からであろう。」と述べたように、上高地は神の地とらえられ、その魅力が語られたのであった。そして「文人の筆」「画家のキャンバス」に触れられていない無垢な点も上高地の魅力であったのである。

また『山岳』に掲載された上高地温泉の広告では、上高地の魅力を次のように謳っている。

旧年の上高地は今日の上高地に非ず、昨夏来遊せられし諸君、未だ上高地を知らざる諸君、此日本のエロー、ストーン、パーク（筆者注\*Yellowstone National Park）を訪ふに躊躇する勿れ。

白雪皚々たる、高山あり、溪流あり、森林あり放馬あり牧牛あり、温泉あり、何をか日本のエロー、ストーン、パークと云はざるべけんや。<sup>(68)</sup>

「エロー、ストーン、パーク」は、中等教育の英語教科書として広く使用されていた「New National Fifth Reader」（積善館本店 明治三五年）第五三課に「SCENES IN THE YELLOWSTONE COUNTRY」として登場する。第五三課は山間のイエローストーン川の描写で始まり、次のような記述がみられる。

The river here separates into three main branches, with a few smaller ones, which bring the aggregated waters of the melted snows from the summits of the lofty volcanic peaks above. Just at the head of the valley there is a small lake, not more than two hundred yards in width.<sup>(69)</sup>

川は、上流の非常に高い火山の山頂の雪解け水がもたらしたいくつかの支流を持つ三つの主な支流に分かれる。渓谷の始まるころには幅二〇〇ヤードにも満たない小さな湖がある。（筆者訳）

雪解け水を以てなす川が流れる地は、小島鳥水が「梓川の記」で描いた「アルプスの一線で最も天に近い槍ヶ岳・穂高山、常念岳の雪や氷が、森林の中で新醸る玉の水が上高地を作」というイメージと重なる。溪谷の端にある湖は正に明神池である。また「the Yellowstone flows through a grassy, meadow-like valley, with a calm, steady current, giving no warning until very near the falls」(イエローストーン川は、草の生い茂る牧場のような谷間を滝付近までは静かに穏やかに流れ続ける(筆者訳))様もまた、夏期に牛の放牧が行われる上高地の自然豊かな光景を彷彿させる。明治一七年四月二三日に南安曇郡安曇村奥原甚三郎他四名は農商務省へ牧場の借地願いを提出し同年一月一〇日に許可され、その後牧場区域を拡大する発展をみせていたのであった。<sup>(17)</sup>

アメリカのイエローストーン国立公園は一八七二年に世界最初の国立公園に指定されたが、上高地は大正一〇年に国立公園の候補地として挙げられ、昭和九年には白馬・立山を含む中部山岳国立公園として日本最初の国立公園の一つに指定されており、上高地を「日本のエロー、ストーン、パーク」と喩えることは的を射た表現であったと言えよう。「日本のエロー、ストーン、パーク」の語は『校友会雑誌』第三三〇号(大正二年二月四日)に掲載された伊藤徳之助「上高地の気候」でも用いられている。英語の教科書に登場するイエローストーンパークに例えられることにより、上高地の溪谷美は容易にイメージし得るものとなったのであった。また丸山注連三郎も『槍が嶽乃美観』で、「余は上高地平原を賞して、日本の公園なりと称へんと欲する」と述べている。<sup>(18)</sup>

内藤も『小説冷炎』で、徳本峠の麓の林の中の光景を、「それはまるで一大公園の――それもよく絵葉書などにある西洋の――内を行くやうであつた。花崗岩の川床を流れる溪流は似るものもなく清らかで、青い絹でも敷きつめたな芝生には黄に紫に名も知らぬ花が天鵞絨のやうな艶に咲き交つてゐた。」と描いている。清浄な雪解け水と豊かな自然により培われた上高地の景観は、「西洋」の「公園」という異国情緒を醸し出していたのであった。<sup>(19)</sup>

また伊藤は「上高地の気候」で、「高低参差たる連亘、信飛の山嶺を、飛驒から吹きあぐる風は、七月の上高地に、殆

ど日々に雷雨を誘つて白樺の鮮緑の梢に、みるからにすがすがしい露を宿らす。濛々たる乱雲、乱積雲は穂高震沢の頂を掠めて盆地一面に凄しい影を蔽ひかぶせて、人は恐威の力に悚する。」とも述べている。雨もまた上高地の魅力を高める役割を担っていたのであった。田部重治も『日本アルプスと秩父巡礼』（北星堂 大正八年）で、「上高地の美は、雨によつて殊に發揮される」と述べている。上高地の魅力は、川や雨といった水と共に語られるものであったと言えよう。

そして宮川の池の畔に位置する穂高神社奥宮造営の際の往路に使用された鍋冠山・大滝山を經由するルートではなく、帰路に使用された徳本峠經由のルートが利用されるようになりその改修が進んだことも、上高地の魅力が増した一因であった。江戸時代より柚道として使われていた所謂島々谷の林道の改修工事が明治二三年に開始され、岩魚留から徳本峠を通り白沢に抜ける道が明治三三年に開通すると、田部が「十有余年以前島々谷に林道が切り開かれてから、深い深い此溪谷は、潤ほひに充ちた島々谷を徳本峠の頂上迄四里登りづめの道と、峠から梓河畔の温泉まで二里降りづめの林道と、合せて六里の山道を躑躅して達することが出来るやうになつた。」と述べたように、徳本峠があるものの、上高地は従来よりは身近になつたと認識されるようになっていたのである。

小島鳥水は「日本アルプスの昔語り」（『女学世界』第一五巻第八号 大正四年八月一日）において、上高地行きを次のように推奨している。

富士と違つて日本アルプスの登山は、婦人に取つてなか／＼容易な事ではない。だから私は日本アルプスの雄姿に憧がれるそれ等の婦人に向つて先づ鎗ヶ嶽山麓の上高地温泉に遊ぶ事をお勧めする。山麓と云つてもこゝまで登るには余程足達者な婦人でなければとても覚束ない。

（中略）

此処は遂近年まで一軒の湯宿も無かつたが、今では温泉宿が一軒、旅籠屋が一軒出来て、美術家などが盛んに写生に出掛ける。夏季には毎年二千人位の避暑客があつて、登山好きの若い令嬢や婦人の元氣な姿を毎日のやうに見

掛ける。

「日本アルプスの登山」といっても、小島が「山麓と云つてもこゝまで登るには余程足達者な婦人でなければとても覺束ない」と述べたように、ここでは徳本峠越えによつてまず上高地に至ることを指している。『大阪毎日新聞』に連載された登山記においても、「（徳本峠は）女の足では迎も越せないといふ程の難所ではなく一番日本アルプスにぶつかつて見やうといふ位の婦人になら訳なく跨げられる山である。」と述べられている。<sup>(17)</sup> 上高地行きは日本アルプス登山の序章ととらえられていたのであった。『小説冷炎』は徳本峠越えに一三ページを費やし、読者にその厳しさと共に景色の美しさを強く印象付けている。

また所謂煤煙事件の後知人を頼り明治四十一年秋を信州松本で過ごした平塚明子は、山麓から上高地に次のように思いを馳せている。

かの憤怒の焼ヶ岳は今日はいかにも呑気さうに幟のやうな烟柱を真直に立て、碧空を白く二分した末はや、横ざまに靡いて高く消える。けれど、上高地温泉あたりからでも眺めやうものなら、戦慄せずには居られないやうな、猛烈な噴烟に天を焦し、万目死に閉ぢて、四辺は緑の一点もなく、髑髏のやうな枯木立は無限の恨を天風に訴へ、見るから、荒涼、凄惨な光景であらう。<sup>(18)</sup>

平塚は上高地を、「戦慄せずには居られない」「荒涼、凄惨な光景」といった自然の荒々しさを目の当たりにし得る場ととらえている。上高地は既に日本アルプスの大自然の一部なのであった。

上高地は、神の地でありながら異国情緒にあふれていた。そして日本アルプスの荒々しい自然に満ちた場であるにも関わらず、比較的足を運びやすいという長所も備えていた。このような上高地の魅力が知られるようになった中、内藤は上高地を小説の舞台に選んだのである。

第二節 創作の地として

黒田清輝の下で洋画を学んだ井口良一が大正四年に梓川左岸の河童橋のたもとに開業した養老館には文人墨客の滞在が多く、登山者にまで「絵かき宿」とよばれて親しまれたほどであった。一高の生徒も、「近年画家で夏を此の地に過す人が余程増えて温泉宿にも其の五六人の姿を見ぬ事はない。」と述べている。また『新潮』第二九巻第二号(大正七年八月)に掲載された「夏の旅行地の感想」で、島本赤彦が「徳合峠の林道」、芥川龍之介が「信濃の上河内」と題しその魅力を語っているように、上高地は画家や作家・歌人等に注目されていたのであった。

大正二年夏、上高地は、「美しく山<sup>マ</sup>上の恋」の舞台として知られることとなった。上高地滞在中の高村光太郎を長沼智恵子が訪ね、『東京日日新聞』で報じられて話題になったのである。

鎗ヶ嶽の麓の上高地温泉、此附近には文士の窪田空穂氏や美術学校の生徒などがある、或日の事此美術家の群が遊びにいつて麓の道を見下してゐると一人の美人が二人の強力に荷物を背負はせ乍ら挙つてくる、其姿がいかにもいたいけ(中略)手を引いてやつて山中には珍しい美人から感謝の言葉を戴かうと思つてゐると今度は山上から一人の青年が強力をつれてとほくと下りてくる、と下から美人、上から青年、ハタと視線が合ふと握手して手を引き乍ら俄に元気づいて温泉の方へ向つて上つていつた、美術家連は啞然(中略)彫刻家の泰斗高村光雲氏の息高村光太郎氏と青鞥社員で女流洋画家の長沼千恵子である、二人が相愛の仲は久しいもので今では「別居結婚」をしてゐる仲ぢやもの、二人して日本アルプスの大●に接し(中略)早くから滞在してゐる光太郎氏を訪ふたものと知れた——と岡焼生からの便りがあった<sup>80)</sup>

(●は判読不能箇所)

高村光太郎「智恵子の半生」(昭和一五年)によると、高村は大正二年八月から窪田空穂や茨木猪之吉らとともに上高地に滞在していた。九月に長沼が訪ねてきた際、高村は岩魚止まで長沼を迎えに行き共に徳本峠を越えたのであるが、記事にあるのは正に二人の再会の場面である。上高地での様子を、高村は次のように描いている。

上高地の風光に接した彼女の喜は実に大きかった。それから毎日私が二人分の画の道具を肩にかけて写生に歩きまわった。（中略）私は穂高、明神、焼岳、霞沢、六百岳、梓川と触目を悉く画いた。（中略）その時ウエストンから彼女の事を妹さんか、夫人かと問われた。友達ですと答えたら苦笑していた。<sup>81</sup>

ここから、上高地の景観が創作意欲をかきたてるものであったことが分かる。この記事が原因で二人は帰京を余儀なくされたのであるが、「美しい山上の恋」は上高地に新たな魅力を加えたと言えよう。内藤は、このようなロマンスの地としても知られた上高地を小説の舞台に選んだのである。

尤も、上高地独特の自然は馴染み難さを感じさせる一面もあつたようである。窪田空穂は『日本アルプスへ』（天弦堂書房 大正五年）で、上高地に滞在中の画家等の会話を次のように記している。

「もう僕は此所に飽き飽きしちまつた。画は描く気にもならないんだし、食物はあの通りだし……。」  
と、T君（筆者注\*高村光太郎）も呟いた。

「好いには好いが、妙に親しみの無い景色だからな」

画家の感動を繋ぐ自然の、私たちの見るものより遠く離れてゐることは、幾度も思はせられた。が、眼を遣る何所にも驚きのあるこの上高地も、この人達にはつまらないのか知らと思つた。

「いけないのかね、此所は？」

私はI君（筆者注\*茨木猪之吉）に向つて云つた。

「かう、圧迫されるやうでな……」

I君は澄んだ眼に、著しい暗い影を漂はせた。<sup>82</sup>

異国情緒に満ちている故、高村や茨木にとり上高地の景観は「妙に親しみの無い景色」と感じられたのであつた。また聳える山々が上高地に足を踏み入れた者を圧倒するだけでなく、朝幻想的な世界を作り出す梓川が日中には強い日

差しに照らされ煌き、落ち着かない気分させる。このような風景は「圧迫」を与え、絵心をそそるとは限らないのであった。

田部重治は、上高地の魅力を次のように述べている。

上高地の二十日間の滞在は、私に何を与へたらうか。それは徹頭徹尾切実な、疲労を知らない緊張的な歓喜の世界に彷徨する感じ其物であつた。つまり此二十日間は最も強い音楽に魅せられた瞬間の引き延ばされたものであつたと云つてよい位、私に取つて緊急的な情緒に充ちて居たのである。<sup>(83)</sup>

上高地は、避暑地でありながら「緊張的な歓喜」に満ちており、安閑と過ごす場ではなかつた。しかしながら、都会を離れ大自然の中にいながらにして刺激を得られる上高地は、創作に最適の地であると言えるのではないだろうか。

独特の自然とロマンスの舞台で知られる上高地には、その自然を愛する作家や画家らが集い、彼らによりその魅力が描き出され伝えられた。内藤もまた、大正四年夏にその一員となつたのである。

### 第三節 上高地における内藤千代子

『小説冷炎』には「東京の諸新聞はいち疾く『玉川和子女史は日本アルプスに新婚旅行中。』と報じてゐた。<sup>(84)</sup>との記述があるが、現実にも『読売新聞』が「よみうり抄」欄で「内藤千代子氏は信州上高地温泉に新婚旅行中なり」と報じていた。また『大阪毎日新聞』は、「上高地温泉には唯一人の女客として内藤千代子あり二十四五歳の青年を伴ひ二階の一室に深く隠れ姿を現はさず高山の気分を味はひつゝ著述をなすと云へり天候定まり登山安全とならば日本婦人穂高登山の先鞭たらんと云ひ居れり」と報じている。<sup>(85)</sup>

そして八月一二日の同紙では、上高地滞在中の内藤の様子が次のように報じられている。

男女は夥しい書物や雑誌類を持込んで二人で寝そべつて書見してゐた。室の壁には二万分の上高地地図が貼られて、

赤い線や青い線が引張つてあつた。探険に往つた物好きな団員は二三質問を発したが、女が落付き払つて応酬したのですつかり煙に捲かれてしまひ（中略）二階に忍んでゐる女は内藤千代子女史だといふ者があつて、再び噂の花が咲く。（中略）<sup>86</sup> 侶伴の青年は二十四五歳の背の高い逞まじげな男であつた。

前述の通り内藤は大正元年に「謎の少女」として『大阪毎日新聞』に登場し、同年末には同社の招聘により大阪を訪れ「初めて大阪へ」と題した周遊記を連載するなど（大正二年一月四〜二〇日 全一四回）、『大阪毎日新聞』は早くから内藤に着目していた。この年、『山岳』の「会員通信」欄に「上高地は満員です大阪の団体六十人、附属中学三十人、計百人以上（八月六日上高地にて松宮三郎）<sup>87</sup>」との投書がみられるように上高地は賑わいを極めており、その中には内藤の著作の読者もいたと思われる。また『小説冷炎』で玉川は一高生とトランプをしたり中学生と会話を交わしたりし、登山談にも熱心に耳を傾けているが、内藤もそうであつたと思われる。そしてこれらにより、内藤の上高地滞在は知られるところとなつたのであつた。

上高地温泉は、明治三十七年一月八日上高地温泉株式会社となつた際に島々の旅館清水屋の主人加藤惣吉が加わり、明治四二年に加藤が直接経営に乗り出して『山岳』に広告を掲載し東京方面での客の勧誘を行うなどした結果、登山以外の客も見られるようになった。小島鳥水は『信濃毎日新聞』に、「明治四十二年は、宿帳に註せられた客が千百三十人、翌四十三年は、千百九十人で、最も混雑する時は、一日に九十人位を泊めることがあるさうである」と加藤から聞いた話を記している。

上高地温泉は、開業当初は平屋一棟であつたが明治末に二階屋の新館が増築され、<sup>88</sup> 客室は平屋に六畳五室と四畳半一室、新館は一〇畳の部屋が各階に六室あつた。一高の生徒は客室の様子を、「旧寮の三階ではないけれど天井が張つてない壁は荒壁のまゝ、建てつけの悪いこと夥だし<sup>89</sup>」と記している。電気はなく明かりはランプで、暖房は囲炉裏とこたつであつたが早朝や雨天時の寒さに備えて火鉢が常備され、梅雨明けから八月半ばにかけて時折使用された。

『山岳』に掲載された上高地温泉の広告によると宿料は一泊三〇銭から八〇銭で、「御来場の砌御指名を乞ふ」<sup>(92)</sup>とあるが明治末から大正初期にかけての登山記等には六五銭との記述が多く、六五銭が相場であったようである。なお外国人は日本食で一人一円二〇銭から一円四〇銭であった。<sup>(94)</sup>また、案内人の上条嘉門次が案内の途中で「温泉場は宿料ばかり高くて、食物粗末なれば、此後御出での節には、おれの小屋に泊まりなさい、岩魚の御馳走は、沢山します、宿料は実費でよいから」<sup>(96)</sup>と声をかけることもあった。

玉川和子は、上高地温泉新館の二階にある「欄は梓川の清流に臨み、霞沢岳の翠巒と相對して、西側へまはれば荒涼たる焼嶽の山容も一目に見渡される。座敷も宿中では一番上等で小綺麗」<sup>(95)</sup>な部屋に滞在した。部屋の内部は次のようであった。

床の間には原稿用紙だの、書籍、雑誌類を積み重ね、びかく光つたニツケル台の卓上鏡や白い細い針金で編んだ綺麗な化粧函や、ハイカラなバスケットや衣裳袋や、袖畳みにしたお召の羽織や緋の帯揚などが、その雑風景な一室に不似合いな濃艶の気をみなぎらせた。瀬川(筆者注\*出版関係者)からの贈物である二分分の上高地地図は壁に貼りつけて、通つて来た路とこれから踏破しやうと云ふ区域とに、紫と赤鉛筆でしるしをつけた。手欄には市村格子の意気な濡手拭がかけられた。<sup>(96)</sup>

先の『大阪毎日新聞』の記事との共通点も多く、実際の内藤の部屋の内部もこのようであったと思われる。「女流作家」らしい書齋で、玉川は次のような日々を送っていた。

朝も四時過ぎにはきつと目をさました。(中略)女中が焚きおとしを十能に盛つて火鉢へ入れに来る頃には、ちゃんと髪を結つて了つて洗面所へ下りて行つた。さうして綺麗に化粧をすました和子の浮き出すやうに白い顔は、毎朝縁側の欄に見られた。<sup>(97)</sup>

滞在中の内藤もこのようであったと思われる、登山客も多い中、朝早くからきちんと化粧をした姿は人目を引いたであ

ろう。帯も「いつも好んできちんとお太鼓に結んでゐた。」<sup>(98)</sup>そして玉川は、「屋根からも川面からもほの／＼と水蒸気が立ちのぼる。それが対岸の山や林を微妙なものにして見せる。瀬の音もまだ眠りから醒めぬやうにやはらかである。薄絹のやうな靄の底を、真珠のやうな底光りを帯びて水が流れる。」<sup>(99)</sup>という梓川独特の朝の光景を目にし、登山客が出発した後宿が「大風の風いだ後のやうな静けさ」<sup>(100)</sup>になると、「家（筆者注\*上高地温泉）のまはりには夏草が茂つてゐると云はうより、家屋が草の中に埋もつて了つてると云つた方が適當なからぬ。釣鐘草の薄紫や毒草だといふ鳥兜。つはぶぎ、虎の尾、百合、あざみ、いちばん多いのが例の柳草。八千草が咲き乱れ、古の物語か絵巻物にでもありさうな場面。薄も穂に出て！ 白昼でも虫が啼いてゐた。」<sup>(101)</sup>という自然の中で過ごした。内藤も同様であつたと思われる。「柳草」は柳蘭ともいい、上高地温泉周辺で見られ、高さ一〜一・五メートルで、葉がヤナギ、紫色の花がランに似ていることからこの名がつけられた。大正二年に上高地を訪れた窪田空穂も、「すいすいと丈の高い、茎も葉も柳に似た、紅の花をもつた花が一面に咲いてゐた。」<sup>(102)</sup>と柳蘭について記している他、丸山注連三郎他『槍が嶽乃美観』でも取り上げている。<sup>(103)</sup>

上高地温泉の食事について、内藤は「日本アルプスへ！（その二）」に次のように記している。

客のたてこんだ折などは三度／＼お豆腐のお汁と、だしがらのやうに味のない岩魚の煮びたしばかり食べさせられる。まだ岩魚の天ぷらがいちばん美味い。その他には魚類も肉類も、ブリキくさい缶詰め物ばかり。野菜類も馬鈴薯の外皆無と来てゐる。

上高地は岩魚が豊富で、案内人の内野常次郎は上高地温泉の裏にある小屋に住み岩魚を釣つて上高地温泉に売っていた。岩魚は囲炉裏を利用して燻製にする。また案内人の大井庄吉は上高地温泉の敷地内に小屋を建てて住みそこで豆腐を作っていたため、それを上高地温泉の料理に使つたのであろう。なお上高地温泉ではヤギや鶏も飼っていた。山菜は、雪解けの遅い場所とれるフキノトウの他、六月頃から山ウド・ヤマブキ・ミズ・コゴミ等が採取できたため、これらが上高地温泉の宿泊客の食膳に上つたことが考えられる。フキについては、小島烏水も「宿屋界限に多いのは、落で大

きいのは五六尺の丈に達する」と述べている。また小島は、「何といふ茸か知らぬが、饅頭笠の大きさほどのを採つて来て、三度の飯に味噌汁として出されたのには閉口した」とも記している。

上記以外の食料や炭などは徳本峠を越えて運ばなければならぬため、費用の点からも種類・量共に限られ、悪天候が続けば食事は保存食の岩魚ばかりになる。またその味も、一高生が「学校なら吾等は正に▲卓子を顛覆した筈」というほどであった。なお食事は、新館のみ各部屋に運ばれた。

温泉については、一高の生徒が次のように記している。

広いことは広か、天井は張つてないが棟に上高地温泉株式会社と書いてある。湯は清澄、何泉だか知らぬが塩泉か炭酸位なので病気にはあまりきゝめもあるまい、而し吾等の疲れ否山中生活の倦怠を慰すには足つた。

「上口の湯屋」として江戸時代より注目されていた上高地温泉であったが、効能より徳本峠越えや登山の汗を流せることが魅力であったと思われる。また長期滞在にも向いていると言えよう。

『小説冷炎』には玉川の執筆の様子は描かれていないが、上高地滞在中内藤は『小説毒蛇』の執筆に時間を費やしたと思われる。数少ない女の客として他の宿泊客の好奇の目にさらされ、作家内藤千代子を知る宿泊客からは何かと詮索される日々であったであろう。しかし約三週間上高地に滞在したことからみて、内藤はこれらを補つて余りある魅力を上高地に出し、避暑地暮らしを満喫していたと思われる。そして新興の避暑地上高地で夏を過ごす作家という新たな魅力を放つたのであった。

### 第三章 『小説冷炎』と槍ヶ岳登頂

#### 第一節 槍ヶ岳の魅力

内藤は『小説冷炎』において玉川の槍ヶ岳・焼岳・穂高岳登頂を描いているが、その中でも槍ヶ岳登山に最も多くページを割き二六〇ページ中三一ページ、描写も詳細である。文政一一年に幡隆により開山された槍ヶ岳は日本アルプスの中でも特に注目されていた山で、その理由は明治三六年一月から一二月まで九回にわたり『文庫』に連載された小島烏水「槍ヶ岳探険記」によるところが大きい。同登山記は明治三五年夏に小島が岡野金次郎と共に槍ヶ岳に登頂した際の様子を綴ったものである。

槍ヶ岳の魅力について、小島は連載の冒頭で次のように述べている。

余が槍ヶ岳登山をおもひ立ちたるは、一朝一夕のことにあらず。

何が故に然りしか。

山高ければなり。

山尖りて嶮しければなり。

（中略）

槍ヶ岳は、いかに名称自詮とはいひながら、その轟々として鋭く尖れるところ、一穂の寒剣、晃々として天を削る。その体たらくは日本山嶽に通有せる尖塔形ピラミッドにあらず、一個無煙の煙筒形チムネイを成して聳ゆるなり

（中略）

槍ヶ岳は万山を統べて、東南の方を顧み、威武遠く富士に迫れども、大霊の鍾まるところ、謙りて之を凌がず、されば万山富士には其徳を敬し、槍ヶ岳には其威を畏る。

(中略)

他は円錐にして彼は尖錐なり、吾性素より尖を愛す、他は婉容にし彼は冷峭なり、我は冷やかなるものに参して初めて醒むるの快きをおもふ、富士は詩に入り画に入りたれど、彼は只だ天上の光線を浴びて白描せられ、混沌たる雲霧に刷かれて黒写さるゝのみ、彼の影は紙に落ちず、筆に載らず、只だ宇宙の或一点にあやしげなる弧線を結びつけて、千万年の後、之を解き得る天才の現ずるを俟つ。<sup>(10)</sup>

小島は槍ヶ岳の魅力として、まず「一個無煙の煙筒形を成して聳ゆる」というその独特の姿をあげている。日本の山といえは富士山のような「尖塔形」<sup>(11)</sup>であるのに対し、槍ヶ岳はウェストンが上田から松本へ向かう途中に見たその山容を「Yarigatake, the “Spear Peak,” the Matterhorn of Japan」<sup>(12)</sup>（槍ヶ岳、槍の峰、日本のマッターホルン（筆者訳））と表現したような独特の形で、アルプスをも擬似体験し得る山であった。高頭式『日本山嶽志』においても、「尖削シテ孤剣半天ニ亘ルコト、野中ノ一本杉ノ如ク、日本山嶽中、コノ奇峭ヲ他ニ見ズ」とその特異な姿が記されている。

また明治三九年に刊行された丸山注連三郎他『槍が嶽乃美観』（高美書店）では、槍ヶ岳の魅力が次のように述べられている。

信陽の西陲一大剣峰あり、槍ヶ嶽と謂ふ。中央山脉の群巒を脚下に平伏せしめ、尖鋭 矗立真に碧落を摩すの観を具し、周らすに深溪を以てし、囲むに峻嶽を以てす。海拔一万一千尺、高きに於て富岳に一籌を輸すと雖も、その險峻巔かに宇内に絶し蒼勁峭削常に杳々たる白雲を冠とし、崢嶸として空際に聳ゆ。<sup>(13)</sup>

槍ヶ岳の魅力は、その特異な山容が屹然と聳えるところにあつた。近寄り難い雰囲気もまた、槍ヶ岳の魅力の一つであつたと言えよう。

なお小島は「鎗ヶ嶽」の表記を用いているが、その意図は信濃と越後の境界に位置する「鎗ヶ岳」<sup>(14)</sup>と区別することにあつた、小島は、「余の所謂鎗ヶ嶽乗鞍嶽は信飛境上のものにして、鎗の高さは海拔三千五百三十二米突（中略）余が目

(八四)

的の鎗ヶ嶽が、人跡未だ到らざるところに、牢く神秘の扉を閉して峻絶嶮絶を極めたるさまは測知するに難からず」としている。

そして小島が「日本全国を通じて、富士山の一万二千四百六十七尺に次いで、鎗ヶ嶽第二」と記したことも、槍ヶ岳に関心が寄せられた一因であると考えられる。小島のこの記述は、志賀重昂が『日本風景論』で槍ヶ岳を「海拔三五三一米突」と記したことによる。小島は「海拔三五三一米突といふ高さは、富士山に亜ぐ高山であるに於てをや」と述べており、日本第二峰という点が魅力であったことが分かる。陸軍測量部による槍ヶ岳の二等三角点測量が行われたのは明治三五年九月で、標高三一七七・五メートルとされ、小島が「鎗ヶ嶽探險記」を連載した当時は日本第二峰であった。ただし、現在の日本第二峰北岳の三等三角点測量は明治三七年に行われており、「鎗ヶ嶽探險記」連載の翌年に槍ヶ岳は日本第二峰ではなくなっている。なお熊谷は前掲論文において「鎗ヶ嶽探險記」第二章では、日本アルプスの山々の標高が列挙されるが、『山水無尽蔵』ではそれが軒並み修正される。」と述べているが、「鎗ヶ嶽探險記」の「日本全国を通じて、富士山の一万二千四百六十七尺に次いで、鎗ヶ嶽第二（傍点筆者）」の部分は『山水無尽蔵』において修正されていない。

また志賀は『日本風景論』で、「日本の山嶽中、火山岩に次ぎ高邁なるは花崗岩」であるため、「花崗岩山の本色を知らんと欲せば、須らく此山（筆者注\*槍ヶ岳）に登るべし」と槍ヶ岳のさらなる魅力を説き、小島にも影響を与えた。花崗岩は「江山の洵美、流水の澄澈、太氣の清爽、地盤の堅硬、土壤の浄潔、微菌発達の予防となり無形上亦た其の所在民人の氣風を感化する所多し」という長所を備え、花崗岩から成る槍ヶ岳は心身を浄化させる場であったのである。自然の神秘を体感する場を求める登山者が槍ヶ岳をめざした理由はここにあった。小島は「槍ヶ岳からの黎明」（『アルピニストの手記』書物展望社 昭和十一年）で、花崗岩について次のように述べている。

初めて槍ヶ岳の名を知つてから、この山に憧憬したのも、久しい間であった。それは志賀重昂先生の『日本風景

論』を読んで、中部日本の花崗岩の章に至つて、越後越中信濃飛騨の境上に綿亘せる花崗岩帯と、その西に延縁せる片麻岩帯との間に、劈入せる火山岩帯と、この三岩帯の錯交する処、是れ日本国中の真成なる「深山幽谷」と、説いてあるところに打ち込んだのであつた。<sup>(10)</sup>

花崗岩が大なる魅力を持つものであつたことが分かる。なお高頭は『日本山嶽志』で、「上河内〔カミウチ〕ハ、梓川ヲ挟ンデ花崗ノ白礫雪ノ如ク、数里ノ間ニ布クヲ見ル」と述べている。花崗岩から成る上高地もまた、清浄な場なのであつた。

では、内藤はどのような理由から槍ヶ岳に着目したのであろうか。内藤は『女学世界』に連載された「日本アルプスへ！」の冒頭では、「登山は兎も角上高地温泉に二十日ばかり暑を避ける予定。」と述べ、上高地到着後も「徳本峠越えの苦しさが忘れられず、もうく登山癖やまのぼりなんぞ真平だと懲りく言ひ合つてみた」。しかし「周囲の怪気焰あやしなほのほにあてられたり刺戟されたり、どうにも脾肉の歎に堪へられなくな」り登山に至つたとしている。加えて、大正二年にウエストンの妻フランセス (Frances Weston) が夫と共に槍ヶ岳の登頂に成功し婦人初の登頂者とされていた一方で日本婦人は未踏であると聞き及び、「一つ私達が卒先して立派に中輻界のレコードをつくつてやらうじやありませんか」との思いを抱いたのであつた。<sup>(11)</sup>

しかしながら、前述の大正四年八月八日付『大阪毎日新聞』にあるように穂高岳も日本婦人未登頂であつた。ではなぜ内藤は槍ヶ岳を選択したであらうか。『説小冷炎』で玉川は、上条嘉門次の小屋を訪れた際に自分が槍ヶ岳に登れるかどうか上条に問い、「人が二日なら三日も掛るつもりでな、無理をせずとやつて見るかな。なアに、大したことはねえで! ……」との回答を得たのであるが、その際に「穂高と鎗ではどつちが易しいんじやう。」との質問もしている。その回答は「穂高は嶮山ぢやでな。」で、これにより玉川は槍ヶ岳を選んだのであつた。<sup>(12)</sup> 一方「日本アルプスへ(二)」で内藤は、「きけば穂高は嶮山だけれども、距離が近いので日帰りに出来る。鎗ヶ嶽の方はどうしても途中野宿同様の岩窟に一

泊、もしくは二泊しなければならぬと言ふのが興味をそゝつて」槍ヶ岳を選んだと述べている。内藤が槍ヶ岳を選んだ理由はここにあると言えよう。

内藤は、日本にありながら特異かつ未知な存在で、より登山の醍醐味を味わえる槍ヶ岳を小説の素材に選んだ。加えて、日本婦人未踏の地という点もまた、内藤にとつて魅力であつたと思われる。

## 第二節 槍ヶ岳登頂をめぐり

では、内藤は槍ヶ岳に登頂したのであるうか。そしてそれは日本婦人の初登頂であると言えるのであろうか。山岳の登頂の証左を挙げるのは非常に困難であるが、以下の記事において内藤の槍ヶ岳登頂に関する記述がみられる。

一、内藤千代子「日本アルプスへ！（その二）」・「日本アルプスへ（三）」いずれも『女学世界』第一五卷第一〇号 大正四年一〇月一日

二、笹野雪彦「日本アルプスで見た内藤千代子女史」『惜春譜』に現はれた女史の苦悶」『淑女画報』第四卷第一〇号 大正四年一〇月一日

三、『信濃民報』大正五年八月一六日

内藤は、『女学世界』に掲載された「日本アルプスへ！（その二）」の冒頭（写真③）に、本文とは別に小さい字で次のように槍ヶ岳登頂を記している。

昨朝六時十五分出発。どうやら鎗ヶ嶽一万六百尺の険をよぢ、下山の途中「坊主茶屋」と申す露宮同様の岩室に一泊いたし、今日午後三時半無事上高地温泉に帰宿仕り候。日本婦人最初の登山者としてのレコードをつりしを御よろこび下さるべく候。（八月十三日）

このページは、内藤が槍ヶ岳出発前に「日本アルプスへ！（その二）」本文を『女学世界』編集部へ送り、その後槍ヶ



写真③『女学世界』第15巻第10号  
(神奈川近代文学館所蔵)

(八八)

岳に登頂して『女学世界』編集部へ報告したものをここに挿入したかのような印象を与える。槍ヶ岳登頂を告げる部分は、言わば速報としての役割を担っていると見えよう。しかし、槍ヶ岳登頂を記した『日本アルプスへ(三)』もまた「日本アルプスへ！(その二)」と同号に掲載されているのである。

一方笹野は投稿の冒頭で、「大阪の教育家とそのつれの腕白連と一緒に」で「上高地の温泉旅館に於て、偶然にもあなたと同宿したのです。」と述べており、『小説冷炎』にも玉川が大阪の小学校教師と交わした会話が記されている。笹野は前述の大阪市教育会の登山団の一員であった可能性がある。笹野の投稿の主旨は『惜春譜』批判で、具体的に内藤に対し好意的であるとは言い難い内容である。笹野は冒頭部分で内藤が男性と共に上高地を訪れたことを揶揄し、内藤の様子を次のように描いている。

ある雑誌に日本アルプス登山の記事を書くために来たといふあなたは、穂高の中腹まで登って引返してしまつた。しかも、しまりのない日本服に、エールを蔽つたあなたの姿は、私等の仲間の反感を少からず買つたのです。「あいつ、中腹まで昇つて、引返したくせに絶頂まで行つたやうに書くぜ！」とある一人は、あなたが他の人に絶頂の様子を熱心にきいたり、あなたの室の壁にはつてあるアルプスの地図に紫鉛筆で線をひいてあるのを知つて憤慨してゐました。

笹野は、内藤の取材を登頂せず登山記を書くものと批判し、登山姿をも浮ついた心情の発露ととらえている。『小説冷炎』

で玉川は上高地出発時、「化粧は相変らず濃く長い袂を朝風にひらくさせ」、袴の下に「西洋婦人の穿くやうな真白なズロース」を付けていた。「長い袂」は登山向きではないが、下着は登山に適している。袴をはき足元はわらじであった。内藤に対し批判的な笹野であるが、槍ヶ岳登頂に関しては次のように述べているのである。

「只今槍ヶ岳の險を跋涉して下山致し候。日本婦人として登山のレコードを作り申し候。」と某所に通信された事を、あなたは真に実行されたものとして、私は満腔の熱誠を以て祝福した。

「某所に通信された事」とは、前述の「日本アルプスへ！（その二）」の冒頭部分であると思われる。笹野の投稿によると、内藤は「日本アルプスへ！（その二）」全文を『女学世界』編集部へ送った後、槍ヶ岳登頂を「真に実行された」ことになる。内藤批判を旨とする笹野の投稿における「私は満腔の熱誠を以て祝福した」との好意的な言は、内藤が槍ヶ岳登頂をなし得たことを示していると言えるのではないだろうか。ただし笹野の言が正しいとすれば、「日本アルプスへ！（その二）」の冒頭部分は槍ヶ岳登頂以前に書かれたものである故、槍ヶ岳登頂の証左たり得ないことになる。

また『信濃民報』には登頂当時の記事はないが、翌大正五年八月一三日に奈良女子高等師範学校の生徒四名が穂高岳を踏破した際に「昨年内藤千代子が槍ヶ嶽に登りて大に気を吐きたるが流石に穂高嶽には登る事を得ざりき」とふれている。この記事から、大正四年における内藤の槍ヶ岳登頂が現地では認知を得ていたことが分かる。

岡茂雄「落穂を拾う」（『アルプ』第一一〇号 昭和四二年四月）はこの記事を取りあげているが、奈良女子高等師範学校生徒の穂高岳登山について述べたもので内藤の槍ヶ岳登頂には言及していない。なお記事には奈良女子高等師範学校の生徒の居住地が番地まで書かれているが、岡は四名のうち三名が実名ではないことを指摘している。遠藤甲太他編『日本登山史年表』（山と溪谷社 平成一七年）は『信濃民報』の同記事を典拠として内藤を日本婦人初の槍ヶ岳登頂者としてしている他、布川欣一編『目で見る日本登山史』（山と溪谷社 二〇〇五年）も内藤を日本婦人初の槍ヶ岳登頂者としている。

ここで指摘しておきたいのは、先に挙げた三点の記事はいずれも内藤の槍ヶ岳登頂を示してはいるが、内藤以外は日本婦人の初登頂であるとは記述していないことである。

また高頭仁兵衛は『山岳』第一三年第二号(大正八年四月一七日)「雑録」欄に掲載された「山ばなし」で婦人の槍ヶ岳初登頂について触れ、山崎は『新稿日本登山史』で高頭と岡を典拠とし、「日本女性による槍ヶ岳登頂は、東京の銀行員夫人である内藤千代子によってはじめて行われた。」と述べた。佐々木誉実は『新稿日本登山史』及び日本山岳会百年史編纂委員会編『日本山岳会百年史』続編・資料編(日本山岳会 二〇〇七年)を典拠として内藤を日本婦人初の槍ヶ岳登頂者としている。また上田茂春『日本の女流登山家 人と本』(未来工房 昭和六二年 信州大学付属図書館所蔵)においても、「大正四年の夏に東京の銀行員夫人である内藤千代子が槍ヶ岳に登った」と記述されている。なお山崎の『日本登山史』(白水社 昭和四二年)には、婦人の槍ヶ岳初登頂に関する記述そのものがない。

ここで典拠とされている高頭の記述は以下の通りである。

東京の或る銀行の重役の若夫婦が、私が穂高へ登った前年に、槍ヶ岳に登られたさうである、これは婦人の槍ヶ岳に登られた最初ださうであつて、私もその婦人が槍ヶ岳の絶嶺に居られた写真を、去る婦人雑誌で拝見したことがある

高頭の同記事には「私も一昨年(註15)の夏に穂高の中の三峯に登つて見て」とあるが、山崎『新稿日本登山史』は高頭の槍ヶ岳・奥穂高岳・前穂高岳縦走を大正五年としており、この「婦人の槍ヶ岳に登られた最初」が大正四年の出来事を指しているとは言えるであろう。しかし高頭は雑誌に掲載された写真を以て婦人の槍ヶ岳初登頂の証左としているが、当時の婦人雑誌に婦人の登山の写真を見ることはできるものの、管見の限りでは内藤に関するこのような写真は存在しない。「東京の或る銀行の重役の若夫婦」という部分も内藤に当てはまらず、何より氏名が明記されていない。以上のことから、高頭の言う「婦人の槍ヶ岳に登られた最初」が内藤であると断定することはできないと考える。従つて高頭の

この記事は、内藤の槍ヶ岳登頂を示し得るものたり得ない。

横田順弥は「雑書集めのおもしろさ」（『函書』第六〇九号 平成二二年一月）で内藤の槍ヶ岳登頂を取り上げ、『明治時代は謎だらけ』（平凡社 平成一四年）で詳述した。横田は『小説冷炎』が「あまりにも臨場感があつて、作り話とは思えない」<sup>(16)</sup>ことを根拠に内藤の槍ヶ岳登頂を事実としているが、作家の作品に「臨場感」が備わっているのは当然であり、『小説冷炎』における「臨場感」を根拠に内藤の槍ヶ岳登頂を事実とすることはできない。また遠藤甲太『登山史の森へ』（平凡社 平成一四年）は、横田を典拠として内藤を日本婦人初の槍ヶ岳登頂者としている<sup>(17)</sup>。

一方『山岳』には、内藤の登頂を否とする次のような投稿が掲載されている。

女学世界に内藤千代子が上高地を書いて居りますが御覽ですか女史は私が行つて居ました頃に若い美男子と一緒に来て居りました、さうして焼から帰つた人には焼の話をきゝ穂高から帰つた人には穂高の話をきゝ、槍から帰つた人には槍の話をきいて居ました、そこで私は女史が三山中どの山に登つた記行を書くかと云ふ事が実に興味ある問題でした、俄然十月一日の女学世界には槍の登山とお出でなすつた其稚氣や大に愛すべきものがあるのを見て笑を禁ずるを得ないのです、然しそれがまた嘘だらけの登山談だから愉快でもありません、要するに此れは山岳の茶目振りだらうと右御茶のみ話に候<sup>(18)</sup>

ここでも内藤の取材が擲揄され、『女学世界』に掲載された「日本アルプスへ（三）」は「嘘だらけの登山談」であるとし内藤の槍ヶ岳登頂を認めていない。

一高の生徒が「小祠（筆者注\*槍ヶ岳山頂の小祠）の中にはいろんな人の名刺がある日本山岳会会員何某としたのもあれば、横文字の走り書もある、有名なる日本アルプスの紹介者英人ウォールター、ウエストン氏も昨年夫人を伴ふて来り鉛筆の走り書に其旨を誌して止めてある」と記したように、槍ヶ岳頂上の小祠に名を残す登山者が多かった。これは登頂の証左となる一方で、ここに氏名を見出すことができなければ未登頂との判断をされかねないであろう。しかし内

藤の槍ヶ岳登頂を巡る議論において、この小祠の紙片を証左として論じられているものはなく、槍ヶ岳山頂で内藤の登頂の証左たり得るものは確認されていないのである。なお前述の通り、『小説冷炎』で玉川一行は小祠に紙片を残している。

内藤の槍ヶ岳登頂の正否に関し、筆者は『小説冷炎』の書名に「小説」の語が付されている点を指摘しておきたい。内藤の著書で書名に「小説」が付されているのは『小説冷炎』と大正七年に刊行された『小説春雨』（京橋堂出版部）の二作である。『毒蛇』の主人公小林幸世は作家で『女学世界』連載中は「小説毒蛇」と題したが、単行本として大正八年に三徳社から刊行された際の書名は『毒蛇』であった。内藤の作品は内藤自身が主人公で内藤の実体験を描いたものと理解され読まれることが多いが、『小説春雨』には女の作家は登場せず、内藤自身を描いたものではない。従って『小説冷炎』もフィクションであることを強調した書名と見るべきで、同書における玉川和子の登頂即ち内藤の槍ヶ岳登頂とすることはできないと考える。

内藤の大正四年夏における槍ヶ岳登頂は『信濃民報』により確認できるが、日本婦人初であることを示し得るものは未だ確認し得ないのである。

### 第三節 「自然の復讐」

書名に「小説」を冠した『小説冷炎』は、内藤にとって言わば初の「小説」であり、作家として新たな世界を拓いたことを示す作品であると言える。では、内藤はなぜ『小説冷炎』において登山を描いたのであろうか。

多くの入人を魅了した仏ロマン主義文学において山岳が描かれたことについて、吉江喬松は「山岳美論」（『自然美論』春秋社 大正一二年）で、「山嶺の美の文芸的表現はどうであらうか。遠景美観、或は中腹以下の人事と密接に交渉ある方面から次第に進んで、やがて絶頂の美観がその表現相を持つことになるであらう。」と述べている。<sup>(10)</sup>「遠景」ではなく「絶頂の美観」を描くためには、作家自身が「絶頂」を極めることが不可欠であった。そして若者の世界を描き支持を得

てきた内藤にとり、青年を魅了している文学の世界を体现することは挑むに値する課題であったのである。登山は、「絶頂の美観」を描かんと作家としての試みであったと言える。

槍ヶ岳登頂の場面で、内藤は次のように述べている。

ぞつと見つめてゐる中に、イブセンの所謂「自然の復讐」と云ふ言葉を思ひ出して、何となく肩先寒く覚えた。まったく山霊といふものはあるかと疑はれる。そして人間の手に神秘の鍵を握らるゝのを厭ふて、相いましめてゐるやうにも見える。さしづめ自分は第一の憎まれ役であらう、「女にさへ登れた」と云ふと鎗の資格は、この後大へん下落することゝなる故、などと思ひつゞけた。<sup>(14)</sup>

「自然の復讐」は、イブセン『鴨（野鴨）』で用いられている台詞によると思われる。「鴨」は『新小説』第一七年第一巻（大正元年一月一日）に森田草平が翻訳を発表し（未完、大正二年二月一八日に新潮社より刊行された。大正二年三月一八日付『東京朝日新聞』には再版の広告が掲載されている。また第七回イブセン会（明治四〇年一月一日開催）<sup>(15)</sup>及び第八回イブセン会（明治四〇年二月六日開催）<sup>(16)</sup>において、柳田国男・長谷川天溪・岩野泡鳴・岡村千秋らによる『鴨』の合評が行われており、関心の高さを示している。

『鴨』における「自然の復讐」とは、以下の通りである。第二幕において、山林を濫伐したというクレীগエルスに対し、老エークダルは「そりや危険だね。結果は好くないよ。山林と云ふものは復讐するからね。」と警鐘を鳴らす<sup>(14)</sup>。また第五幕で銃により孫のヘードイツヒが死亡した際にも、老エークダルは「森が復讐するのだ。」と二度呟いている。<sup>(15)</sup>

第八回イブセン会の合評において、長谷川天溪は「其れにしても森の復讐といふのは解らぬ。」と口火を切った。そして「森の復讐」とはヘードイツヒへの親の虐待に対してなされたものであり、また「自然に発達する鳥やクリスマス、トリイなどを不自然にも森の内へ橋にして老エークダルは楽しんで居る、斯うなるのは自然の復讐ぢやないか。」とする柳田国男、老エークダルが「北方の山林で森の偽地図を書いた」ことに「森がつきまとうて来る」のだとする岩野泡鳴の

説等が出されている。結論は出ていないが、人の成長を含む自然のありのままの状態に足を踏み込もうとする行為に対してなされる罰を、「森の復讐」ととらえていることが分かる。

内藤が描いた「人間の手に神秘の鍵を握らるゝのを厭ふて、相いましてあるやうにも見える」槍ヶ岳は、親しみを感じさせる山ではなく、むしろ人を拒絶するものである。そして内藤は、登山による「山霊」の祟りのようなものを想像し、話題となった『鴨』のこの記述を想起したのであった。また、女の登山に対する拒否反応についても言及している。

内藤は、槍ヶ岳登山を描いた著書の書名に「小説」の語を付し、『女学世界』の連載と『説冷炎』以外で槍ヶ岳登山に全く触れていないが、「自然の復讐」に対する思いや女の登山に対する拒否反応と無縁ではないように思われる。また内藤は、穂高岳の頂上で案内人の佐内に「残念ぢや、こんな事実をみんな実際と思はねえだかも知れましねえ、他に證人があんのぢやものね。」<sup>(10)</sup>と語らせているが、山岳の登山を証明することの難しさを知ったこともまた、書名に「小説」の語を冠して著書を世に送った一因ではないだろうか。

内藤は、登山により「絶頂の美観」を描くことを試み、山頂で「自然の復讐」を想起した。山の魅力を伝える文学作品とは趣を異にするが、独自の世界を示したものであると言えるであろう。

## 終章

内藤千代子『説冷炎』からは、文学の人気と相待つ中で山への関心が高まっていた様を見ることができ、山の自然の神秘に触れ、また文学の世界を追体験する場を求めて山に足を運ぶ人々が現れ、それをなし得ない多くの人々は山を描いた文章により自然とのふれあいを求めたのであった。数多の険峻と日本にありながら未知で異国情緒にあふれた日本アルプスは、その舞台として多彩な魅力を放つたのである。

このような中、避暑地上高地に滞在して自ら登山を試み、新しい文学の世界を体現せんとする者が登場していた。作家のみならず、画家や詩人ら多彩な分野の芸術家もそれに加わった。自然の描き手たらんことにも関心が抱かれていたことは注目すべきであり、新たな営みとしてとらえることができる。

内藤千代子は、自然の描き手となり作家としての更なる飛躍を図るべく上高地を訪れ、『小説冷炎』を世に送ったのであった。鶴沼や箱根に滞在する若者を描いて人気を博してきた内藤にとり、新興の避暑地上高地を舞台とした小説は本領発揮とも言えるもので、読者の期待に応え得る作品であったと言えよう。そして上高地に滞在して登山に挑み、広く愛されていた文学の世界を体現せんとする様は円熟味を増す作家内藤千代子の新たな魅力となったのであった。またそれは、大正四年八月に『女学世界』で連載が始まった『小説毒蛇』に対する期待にも結びついたと思われる。『小説毒蛇』には、内藤の従来作品とは異なり日常の俗事に翻弄される作家が描かれており、ここからも内藤が転機を迎えたことが伺えるのである。

注

- (1) 広告より 内藤千代子『惜春譜』 牧民社 大正四年
- (2) 『女学世界』第一七巻第六号（大正六年六月一日）まで連載され、加筆修正後大正八年一〇月一日三徳社より刊行
- (3) 『小説冷炎』二頁には「四月廿五日」とあるが、第一高等学校寄宿寮編・発行『向陵誌』（大正一四年）によると、例年三月一日に行われてきた同祭は、大正四年のみ四月二〇日に行われた（五一～五二頁）
- (4) 内藤千代子『小説冷炎』 京橋堂 大正五年 四六頁
- (5) 『小説冷炎』 二〇～二二頁
- (6) 『女学世界』第一七巻第六号 大正六年六月一日

- (7) 『説冷炎』 六六頁
- (8) 『説冷炎』 六七頁
- (9) 『説冷炎』 五四頁
- (10) 『説冷炎』 一四九頁
- (11) 『説冷炎』 二五八頁
- (12) 『説冷炎』 二六〇頁
- (13) 『大阪毎日新聞』大正四年七月一四日
- (14) 横山篤美 『上高地物語——その歴史と自然』山と溪谷社 昭和五六年 一二五頁
- (15) 『説冷炎』 一一二頁
- (16) 「乗鞍の堂守と穂高の仙人(板殿正太郎翁と上條嘉門次翁)」『山岳』第四年第三号 明治四二年一月三日
- (17) 『説冷炎』 一六一頁
- (18) 『説冷炎』 一六四頁
- (19) 『説冷炎』 一八二〜一八三頁
- (20) 『説冷炎』 一八七頁
- (21) 高橋宮二 『探勝日本アルプスと山麓の景勝』教倫堂出版部 明治四三年 六五頁
- (22) 『説冷炎』 一八九頁
- (23) 烏水「鎗ヶ嶽探険記 第九章」『文庫』第二四卷第五号 明治三六年二月一五日、『山水無尽蔵』(隆文館 明治三九年)
- 所収
- (24) 『説冷炎』 二三一頁
- (25) 『説冷炎』 二三七〜二三八頁
- (26) 『説冷炎』 二二九頁

- (27) 『小説冷炎』 二五七頁
- (28) 『女学世界』 第一五卷第九・一〇号 (第一〇号は二回分) 大正四年九月一日・一〇月一日
- (29) 「誌友俱樂部」欄 『女学世界』 第一五卷第一二号 大正四年一月一日
- (30) 志賀重昂 『日本風景論』 政教社 明治二七年 一二一頁
- (31) 日本山岳会百年史編纂委員会編 『日本山岳会百年史』 続編・資料編 日本山岳会 平成一九年 A 13
- (32) 「会報」欄 『山岳』 第四年第二号 明治四二年六月三〇日
- (33) 「会報」欄 『山岳』 第六年第三号 明治四四年一月一日
- (34) 上條武 『上高地』 神河内絵画き宿 独木書房 平成八年 五七頁
- (35) 松本市編 『松本』 松本市 大正一〇年 四六頁
- (36) 「山岳」 第四年第二号 (明治四二年六月三〇日) 「会報」欄に「飛騨山岳会の成立」掲載
- (37) 「会報」欄 『山岳』 第四年第二号 明治四二年六月三〇日
- (38) 教科書研究会編 『国定教科書 国定教科書作文練習書 高等小学一、二学年用』 嵩山堂 明治三八年 三七頁
- (39) 牛丸工編 『芥川龍之介の槍ヶ岳登山と河童橋』 上高地登山案内組合 平成二〇年 二〇頁
- (40) 『日本山岳会百年史』 続編・資料編 一〇五頁
- (41) 「雑報」欄 『山岳』 第八年第二号 大正二年八月三一日
- (42) 二高山岳会部史編纂委員会編 『清き溪から真夏の空へ ― 第二高等学校山岳部々史』 二高山岳会 平成一七年 七頁
- (43) 第一高等学校旅行部縦の会編・発行 『一高旅行部五十年』 昭和四三年 一二頁
- (44) 作道好男・江藤武人編 『伊吹おろしの雪消えて ― 第八高等学校校史 ―』 財界評論新社 昭和四八年 四八八頁
- (45) 『一高旅行部五十年』 二頁
- (46) 第一高等学校寄宿寮編・発行 『向陵誌』 大正一四年 一一〇八頁、『一高旅行部五十年』 一〇・一二頁
- (47) 『一高旅行部五十年』 九頁

- (48) 『一校旅行部五十年』 五頁
- (49) しらう「中央日本アルプスより 石楠花の花に添へて」『校友会雑誌』第二五〇号 大正四年二月一五日
- (50) KM生「山岳所感」『校友会雑誌』第二三〇号 大正二年二月四日
- (51) 『時事新報』大正二年八月二五日
- (52) 「紀行文家の群れ——田山花袋氏——」『小島烏水全集』第一〇巻 大修館書店 昭和五五年 三二二頁
- (53) 『山水無尽蔵』という本のこと」『小島烏水全集』第一〇巻 三二二頁
- (54) 小島烏水『雲表』(左久良書房 明治四〇年) 所収
- (55) Ernest Mason Satow & A. G. S. Hawes "A Handbook for Travelers in Central and Northern Japan" マーナー社 一八八一(明治一四)年 二六五頁
- (56) 「ガウランドの登山事蹟 附 甲賀宣政氏の事ども」『小島烏水全集』第一〇巻 三三二頁
- (57) 内藤は『小説冷炎』八二頁に「ジャパン、アルプス」と記している
- (58) 『大阪毎日新聞』大正四年七月八日・二二日
- (59) 大正六年大鑑閣より『日本アルプス縦走記』として刊行
- (60) 『大阪毎日新聞』大正四年七月二八日
- (61) 『向陵誌』一一一〇～一一二二頁
- (62) 「日本アルプスの憶ひ出」『小島烏水全集』第一〇巻 三二六頁
- (63) 朝見潤「解題」『窪田空穂全集』第六巻 角川書店 昭和四〇年 四六〇頁
- (64) 『大阪毎日新聞』大正四年七月一三日 『山岳』第一〇年第一号(大正四年九月一〇日)に転載
- (65) 『小説冷炎』一一八～一二九頁
- (66) 『小説冷炎』一四七頁
- (67) 小島烏水「上高地は神河内が正しき説」『山岳』第二九年第一号 昭和九年六月一日

- (68) 横山篤美『上高地開発史』山と溪谷社 昭和四六年 一八頁
- (69) 『山岳』第五年第二号 明治四三年七月一五日
- (70) Charles J. Barnes “New National Fifth Reader” 積善館本店 明治三五年 二四〇頁
- (71) “New National Fifth Reader” 二四〇～二四一頁
- (72) 『上高地―その歴史と自然―』八九～九一頁
- (73) 丸山注連三郎他『槍が岳乃美観』高美書店 明治三九年 一七五頁
- (74) 『小説冷炎』 一一二五頁
- (75) 田部重治『日本アルプスと秩父巡礼』北星堂 大正八年 一一九頁
- (76) 『日本アルプスと秩父巡礼』 一一二頁
- (77) 『大阪毎日新聞』大正四年八月一〇日
- (78) らいてう「高原の秋」『青鞥』第一卷第三号 明治四四年一月一日
- (79) 『東京朝日新聞』大正三年八月六日
- (80) 『東京日日新聞』大正二年九月五日
- (81) 高村光太郎「智恵子の半生」『昭和文学全集』第4巻 小学館 平成元年 五五一頁
- (82) 窪田空穂「日本アルプスへ」『窪田空穂全集』第六巻 角川書店 昭和四〇年 六九頁
- (83) 『日本アルプスと秩父巡礼』 一三〇頁
- (84) 『小説冷炎』 一四三頁
- (85) 『読売新聞』大正四年八月一二日
- (86) 『大阪毎日新聞』大正四年八月八日
- (87) 「会員通信」欄『山岳』第一〇年第二号 大正四年二月二七日
- (88) 『小説冷炎』 一五四～一五五頁

- (89) 『信濃毎日新聞』大正二年八月三日  
「上高地の記」に新館の記述があり、明治四二年以前に建てられたと思われる
- (90) 『時事新報』大正二年九月三日
- (91) 『山岳』第四年第三号 明治四二年一月三日
- (92) 『一校旅行部五十年』一頁、「上高地の記」、『東京朝日新聞』大正三年八月五日  
広告より 『山岳』第四年第三号 明治四二年一月三日
- (93) 『説冷炎』 一三一頁
- (94) 『説冷炎』 一三二頁
- (95) 『説冷炎』 一四五〜一四六頁
- (96) 『説冷炎』 一四五頁
- (97) 『説冷炎』 一四六頁
- (98) 『説冷炎』 一四八頁
- (99) 『説冷炎』 一四三頁
- (100) 『説冷炎』 一四八頁
- (101) 『日本アルプスへ』『窪田空穂全集』第六卷 六四頁
- (102) 『槍が嶽乃美観』一三八〜一三九頁
- (103) 『梓川の源流』
- (104) 『時事新報』大正二年九月一日
- (105) 小島烏水 「鎗ヶ嶽探險記 第一章」『文庫』第二二卷第二号 明治三六年一月一日
- (106) Walter Weston "Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps" ヌレー社 一八九六(明治二九)年 一六頁
- (107) 高頭式 『日本山嶽志』博文館 明治三九年 二七四頁
- (108) 『緒論』より 『槍が嶽乃美観』
- (109) 『緒論』より 『槍が嶽乃美観』

- (110) 山崎安治は『日本登山史』（白水社 昭和四四年 一四三頁）で「鎗ヶ岳」を「鹿島槍」としてしている
- (111) 小島烏水「鎗ヶ嶽探険記 第二章」『文庫』第二二巻第五号 明治三六年二月一五日
- (112) 『日本風景論』 一四七頁
- (113) 小島烏水「槍ヶ岳からの黎明」『アルピニストの手記』書物展望社 昭和一二年 一二頁
- (114) 『日本登山史』 一五七頁
- (115) 『日本山岳史』 一五五頁
- (116) 小島烏水『山水無尽蔵』隆文館 明治三九年 二四頁
- (117) 『日本風景論』 一二九頁
- (118) 『日本風景論』 一四七頁
- (119) 『日本風景論』 一三〇頁
- (120) 『アルピニストの手記』 一一頁
- (121) 『日本山嶽志』 二七三頁
- (122) 内藤千代子「日本アルプスへ！」『女学世界』第一五巻第九号 大正四年九月一日
- (123) 内藤千代子「日本アルプスへ（三）」『女学世界』第一五巻第一〇号 大正四年一〇月一日
- (124) 『小説冷炎』 一六九頁
- (125) 『小説冷炎』 一四〇頁
- (126) 『小説冷炎』 一七一頁
- (127) 『小説冷炎』 一七四頁
- (128) 『信濃民報』大正五年八月一六日
- (129) 岡茂雄『炉辺山話』（実業之日本社 昭和五〇年）所収「日本女性の穂高初のぼり」
- (130) 遠藤甲太他編『日本登山史年表』山と溪谷社 平成一七年 二〇頁

- (131) 布川欣一編『目で見る日本登山史』山と溪谷社 二〇〇五年 一八七頁
- (132) 山崎安治『新稿日本登山史』白水社 昭和六一年 三二九頁
- (133) 佐々木誉実「大正4年、槍ヶ岳に本邦女性として初登頂した内藤千代子のこと」『日本山岳文化学会論集』第一二号 平成二七年一二月
- (134) 上田茂春『日本の女流登山家 人と本』未来工房 昭和六二年 二二頁 信州大学付属図書館所蔵
- (135) 『新稿日本登山史』三三〇～三三一頁
- (136) 横田順弥「雑書集めのおもしろさ」『図書』第六〇九号 平成二二年一月
- (137) 遠藤甲太『登山史の森へ』平凡社 平成一四年 一二二～一二三頁
- (138) 会報欄『山岳』第一〇巻第二号 大正四年二月二七日
- (139) 『東京朝日新聞』大正三年八月四日
- (140) 吉江喬松「山岳美論」『自然美論』春秋社 大正二二年 一二四頁
- (141) 『説冷炎』一八八頁
- (142) 『新思潮』第三号 明治四〇年一月一日
- (143) 『新思潮』第四号 明治四一年二月一日
- (144) ヘンリック・イブセン著・森田草平訳『鴨』新潮社 大正二年 九五頁
- (145) 『鴨』二八六・二八八頁
- (146) 『説冷炎』二三八頁

本研究におきまして、西糸屋前経営者奥原教永氏（昭和五年生まれ）より貴重なお話を伺いました。ここに記してお礼申し上げます。